

# ◆日展の横顔◆

*profile of nitten*

## Contents

### 第1章 日展豆知識

1. 日展はこうして生まれた
2. 日展が輩出した芸術家たち

### 第2章 日展と文学

1. 宮尾登美子『序の舞』のモデル・上村松園
2. 漱石と日展の画家たちの交流

### 第3章 日常の中に

1. 会場を飛び出した日展作家の作品

# ◆日展の横顔◆

## *profile of nitten*

### 第1章 日展豆知識

#### 1. 日展はこうして生まれた

##### —日本の美術振興を目的に—

江戸時代の長い鎖国の後、国を開いて外国との交流を始めると、欧米諸国の文化の高さは日本人々を驚かせました。欧米の国々に肩を並べるために、我が国は産業の育成に努めなくてはいけないのと同時に芸術文化のレベルアップの必要性も強く感じていたのです。

明治33年、当時オーストリア公使だった牧野伸顕は海外の文化事情に肌で触れ、ウィーンを訪れた文部官僚に公設展覧会を開催することの大切さを情熱的に語っています。フランスでは、ルイ14世時代の1667年からサロンで開かれていた鑑賞会が公設展に発展しており、それがフランスの芸術面の高さに大きく貢献していました。

「我が国も公設の展覧会を開き、文明国として世界に誇れるような芸術文化を育成しようではないか」牧野は日本の美術の水準をもっと高めたいという夢を抱いていました。

この夢が実現するのが明治39年です。文部大臣になった牧野はかねてより念願の公設展開催を決め、明治40年に第1回文部省美術展覧会（略して文展）が盛大に開催されたのです。

この文展を礎とし、以来、時代の流れに沿って「帝展」「新文展」「日展」と名称を変えつつ、常に日本の美術界をリードし続けてきた日展は97年の長きに渡る歴史を刻んできました。

最初は日本画と西洋画、彫刻の3部制で始まりましたが、昭和2年の第8回帝展から美術工芸分野を加え、昭和23年の第4回日展からは書が参加して、文字通りの総合美術展となったのです。

昭和33年からは、民間団体として社団法人日展を設立して第1回日展を開催し、さらに昭和44年に改組が行われて今日にいたっています。

#### 2. 日展が輩出した芸術家たち

長い歴史が示すように、日展はたえず新しい時代とともに、脱皮をかさねながら日本美術界の中核として、近代日本美術の発展に大きく貢献してきました

ル。

## 《日本画》



**杉山寧**  
(1909～1993)  
知的な空間  
処理と鋭い  
造形感覚で  
戦後の日本  
画壇をリー  
ドした

『孔雀』昭  
和31年



**東山魁夷**

(1908～1999)  
透明な空気感の中、夢幻的な  
メルヘンの世界を謳い上げる

『白馬の森』昭和47年



**横山大観**

(1868～1958)  
精神性の高い作品を発表し、  
近代日本画確立に一生を捧げた

『皇大神宮』昭和13年

## 《洋画》



**黒田清輝**  
(1866～1924)  
日本画的な洋  
画を目指し、  
広がりや奥行  
きのある空間  
が特徴

『赤小豆の簸  
分』  
大正7年



**藤島武二**

(1867～1943)  
日本画から洋画に転じ、力強い  
タッチの作品を発表し続けた

『春』昭和6年



**棟方志功** (1903～1975)  
奔放で力の満ちた板画作品で油絵以  
上の緊張感を見せた

『「津軽海峡」の柵』昭和40年

## 《彫刻》

### 朝倉文夫

(1883~1964)  
対象物の生態をいきいきと捉え、みずみずしく造形した

『餌食む猫』昭和17年



### 清水多嘉示

(1897~1981)  
油絵から彫刻に転じ、内実のこもった女性像が特徴

『響』昭和37年



### 山崎朝雲

(1867~1954)  
仏師から彫刻の道を志し、木彫で写実を力強く表現した

『大石良雄』昭和8年

## 《工芸美術》

### 板谷波山

(1872~1963)  
陶芸を職人芸から個性的な芸術へと発展させた

『花卉文彩磁瓶』昭和7年



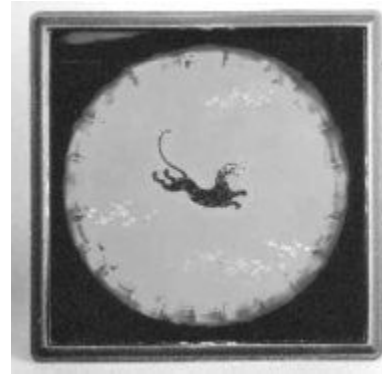
### 楠部彌式

(1897~1984)  
自ら編み出した技法で近代的造形作品を制作した

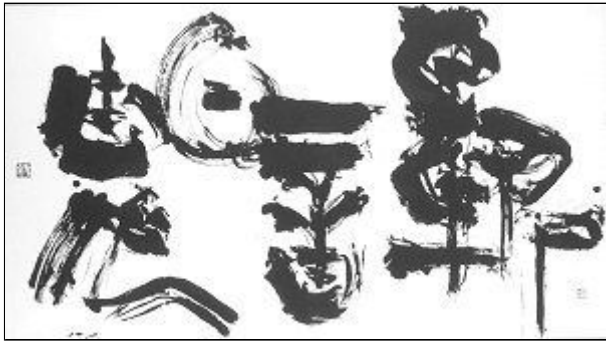


『人』昭和37年

**松田権六**  
 (1896~1986)  
 輪島塗の伝統を受け継いで  
 時代にあった作品を生み出した  
 『膳（動物蒔絵膳）』昭和3年



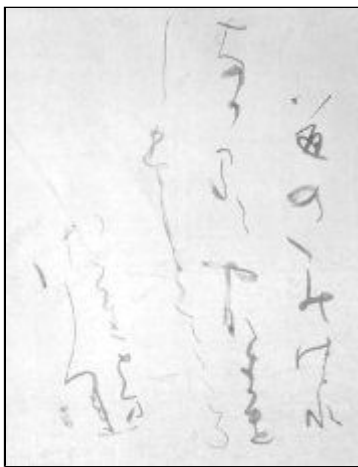
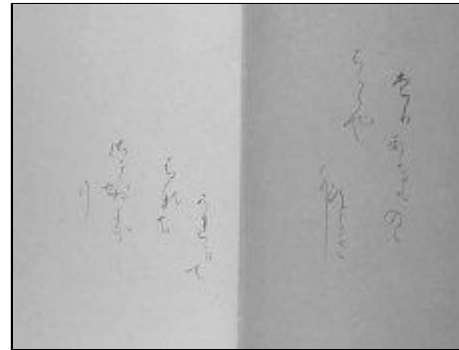
## 《書》



**青山杉雨**  
 (1912~1993)  
 中国古代文字を現代に生かし、新た  
 な造形を創出した

『暗鬼を斬る』昭和51年

**尾上柴舟**  
 (1876~1957)  
 かな書道界をリードし、漢字と  
 仮名の調和体を提唱した

『櫻』昭  
和30年

**日比野五鳳**  
 (1901~1985)  
 ハリのある文字で現代のかな美を創  
 造した

『清水』昭和39年

# ◆日展の横顔◆

## profile of nitten

### 第2章 日展と文学

日展は90年以上に及ぶ長い間、その時代々々に足跡を残す芸術家たちを輩出しました。芸術家たちと文学者たちの交流は盛んに行われてきたので、作品を創造する喜びや苦しみの姿は文学者たちにとって格好のモチーフとなりました。日展の芸術家たちは、多くの文学作品に登場しています。吉川英治賞を受賞した宮尾登美子の『序の舞』の主人公・島村津也は、日展を中心に活躍した女流画家の上村松園がモデルになっています。また、夏目漱石の『三四郎』や『それから』にも日展の作家が登場します。

#### 1. 宮尾登美子『序の舞』のモデル・上村松園

##### 絵に魅せられた女流画家の生涯

幼い頃から絵を描くのが大好きな島村津也（上村松園）は、その才能を信じた母の愛に支えられ、画塾に通ってその腕を上げていきました。15歳で第3回内国勸業博覧会に出した作品が受賞して天才少女と騒がれます。

明治40年の第1回文展（現在の日展）に出した「長夜」では3等賞を受賞し、以来、何十年も日展を主な活動の場としてきたので、松園の代表作はほとんどすべて日展出品作です。『序之舞』は文展、帝展、日展へと作品を出品しつづける松園の創作活動を縦系に、恋愛模様を横系にして物語が綴られています。



男性の世界だった画壇で女性が生き抜くことさえ難しいのに、様々な逆風に耐えつつ次々と秀作を生み出してゆく苦しさや喜び。絵にとり付かれたひとりの女の生涯は読む者の胸を打ちます。

「蛸」「娘深雪」「舞支度」などは、満ち足りた生活の中で生まれた秀作です。たおやかで繊細な日本の女の美しさを余すところなく表現しています。そしてその人との悲痛な別れの後には、「焰」で恋の苦しみに身を焼く女を描き、自分の心を絵の世界に昇華させています。

『焰』大正7年

やがて息子も日本画家に成長し、日展への母子出品も果たします。女性ならではの様々な苦しみ乗り越えた作品は円熟味を加えます。

昭和11年には「序之舞」を発表します。息子の嫁たね子をモデルに、仕舞の中で最もテンポが緩やかで品のよい序の舞の終わりに近いところの姿を捉えています。文金高島田に振り袖の令嬢の舞姿は毅然として侵しがたい女性の気品を湛えていました。「凛として会場を圧していた」との評を得て、代表作となります。



『序之舞』昭和11年

昭和21年には日展審査員を任せられ、ついには女性初の文化勲章受章者にまでなったのです。息子も大成して後に文化勲章を受章。母子文化勲章を受章するのも日本初という快挙でした。生涯を絵に捧げた女性の生き様は美しく、壮絶です。

『序の舞』は映画化され、主人公は名取裕子が情熱的に演じました。

## 2. 漱石と日展の画家たちの交流

夏目漱石は文学だけではなく絵画にも造詣が深い作家でした。胃病を病んでからは、精神的なリラックスを求めて、絵を描く喜びを見つけました。また、様々な展覧会に足を運び、絵を鑑賞する楽しみを堪能しています。日展の審査員たちの中には親友もあり、作品の中には別の日展の審査員をモデルとして登場させたりもしています。

### 浅井 忠

漱石の尊敬する画家・浅井忠は明治40年の第1回文展で洋画部門の審査委員を務めています。しかし、今後の活躍を期待されていた浅井は、残念ながらこの年に亡くなってしまいました。漱石は、浅井への追悼の意味も込めて、作品の中に浅井をさりげなく登場させています。

『三四郎』の主人公・三四郎がヒロイン・美弥子たちと展覧会を見に行くと、そこに深見という亡くなった画家の遺作が展示されています。この「深見」は浅井をモデルにしていると言われています。

「深見さんの水彩は普通の水彩のつもりで見ちゃいけませんよ。（中略）深見さんの気韻を見る気になっていると、なかなか面白いところが出てきます」（『三四郎』より）

また、『それから』の主人公・代助が兄の家を訪れると、浅井忠の絵を染め抜いた湯飲みが置いてあります。さりげない一場面の中に浅井忠の絵を出すことにより、小説の背景に深みを加えているのです。

### 友人・中村不折、弟子・津田青楓

漱石の友人である中村不折は、第1回文展からずっと西洋画に出品し続けており、審査委員でもありました。漱石の友人・正岡子規もまた、不折



浅井志之丞がめつたのじり。

こうして文学者は画家から表現を学び、画家も文学者の批評を参考にして作品の質を高めていったのです。

津田青楓は画家でありながら漱石の小説を敬愛し、弟子として慕っていました。津田は何回も文展に出展しては落選しており、漱石はなぐさめの手紙を書いています。



『慮生の夢(邯鄲)』昭和4年

「いよいよ文展が開会になりました。あなたは落選のようですが当否は行って見ないうちは何とも言えませんが（中略）その他にもまだ落選者がたくさんあるようですが、どうかしてその人々の作品を当選者と対照して見せたい。どうですか（中略）落選展覧会と号して天下に呼号したら」（大正2年10月15日、津田青楓への手紙より）

その後、奮起した津田は第5回文展に「五月のインクライン」という作品で入選しています。

## 漱石にとっての文展の存在

漱石は筆まめな人で、友人や知人によく手紙やハガキを出しています。秋になり文展の開催期間の手紙には、季節の挨拶代わりに「文展」の字が出てきます。

「上野に文部省の展覧会あり」（明治41年10月27日の手紙より）

「御手紙拝見、文展の批評思ったより長くなり候」（大正元年10月21日の手紙より）

「拝啓 文展だの御大典だのでなかなか陽気なことでございます」（大正4年10月22日の手紙より）

当時の文化人にとって文展がどんなに興味多い存在だったかがうかがえます。

また、東京朝日新聞に第6回文展の評を「文展と芸術」というタイトルで書いています。なにかと漱石と比較される森?外も第1回文展から審査員を続けています。日本の美術と文学が深く関わり合いながら進歩してきた歴史が偲ばれますね。



# ◆日展の横顔◆

*profile of nitten*

## 第3章 日常の中に

日展作家の作品は、展覧会だけでなく、実はみなさんの身の回りにもたくさんあります。散歩する公園の中に、いつも通っている駅の構内に日展で育った作家の作品が存在しています。

### 1. 会場を飛び出した日展作家の作品

#### 上野の西郷さんも

上野公園の西郷隆盛像を知っていますか？

犬を連れている姿は、親しみを込め「上野の西郷さん」などと呼ばれています。

これは、第1回文展から彫刻部門の審査員を務めている高村光雲の作品です。



上野公園には、ほかに日展作家の作品が2作品あります。吉田三郎の「野口英世像」と清水多嘉示の「緑のリズム彫刻」がそれです。

「野口英世像」は、黄熱病の研究に命をかけた英世の偉業を偲ぶために立てられたものです。白衣を着て右手に試験管を掲げている姿に、英世の情熱が現れています。

緑の相談所の庭にあるのが「緑のリズム彫刻」です。手を取り合ってバレエを踊る少女の姿が軽やかです。

東京での日展の開催地は上野公園内の東京都美術館です。会場で作品を見たあと、公園を散策しつつ彫刻を探してみてもいかがでしょうか。



井の頭公園には彫刻園が

井の頭公園内に北村西望の彫刻美術館があるのをご存知でしたか。

昭和28年、長崎の平和祈念像制作のために北村のアトリエが園内に作られました。

昭和30年に平和祈念像が完成した後、アトリエと祈念像の原型や北村の作品が寄贈され、平成5年に彫刻館、アトリエ館を含む彫刻園が整備されました。



明治17年生まれの本村は、東京美術学校（現東京藝術大学）の学生時代に朝倉文夫らと出会い、終生の友として切磋琢磨しつつ制作に励みました。

第9回文展で「怒濤」が2等賞、第10回に「晩鐘」が特選主席に選ばれてからは、「たくましく、力溢れる男性像」という本村独自の作品スタイルを確立し、彫刻家としての位置をゆるぎないものにしていきました。

本村は故郷の長崎に戦後日本の平和の象徴として「平和祈念像」を制作し、「力強い平和」をテーマに5年の歳月をかけて完成させました。昭和62年に102歳で亡くなるまで制作への意欲は衰えなかったということです。

この彫刻園には本村の作品が約240点集められています。明治、大正、昭和という激動の時代にあって、常に積極果敢に作品を発表し続けた本村の作品の軌跡を辿ることができるのです。

## ここにも日展作家の作品が

今まで挙げた以外にも新宿中央公園では分部順治「瞭」、渡辺弘行「髪」を、水元公園では本村西望「花吹雪」を、横浜の山下公園では加藤顕清「約束」を見ることができます。

また、東京駅構内には圓鋸勝三の「仲間」が設置され、待ち合わせの目印になっています。

みなさんの街にも、日常生活の中に溶け込んでいる日展作家の作品があるかもしれません。